

東アフリカ・スーダンへ

西アフリカや中東地域での業務を中心に携わってきた私にとって、スーダンは長年行ってみたい国であった。スーダン人の多くの人々が湾岸諸国に出稼ぎに出ており、これまでも多くのスーダン人と業務/交友を共にする機会が多々あった。



このようなスーダン本国以外で知り合ったスーダン人は、一般に当たりが柔らかく、また信用できるというのが私のスーダン人気質の印象である。今回、ようやくスーダンを訪問することができた。スーダンについては、これまでAAINewsで何度か取り上げてきたので、今回は訪問地であるカッサラでの見聞やスーダン人気質に特化して紹介していきたい。

スーダンと聞くと、ちょっと治安を心配する人もいであろう。南には最近分離独立した南スーダンがあり、東にはエリトリア、そして国内ではダルフール問題が現在も影響している。たしかに、ダルフール州や南スーダンに隣接する州への立ち入りには問題があるが、首都ハルツームや今回の訪問地カッサラは、至って平穏である。道で絡まれたりすることもなく、また夜の一人歩きも危険性を感じることはほとんどなかった。青年海外協力隊員も派遣されており、地域内で自由に行動しながらそれぞれの分野で貢献している。

まず何はともあれ仕事を始める前に食事である。スーダン共通の事情と思うが、食事体系は朝食主体である。朝食と言っても、日本でいう「ブランチ」である。11時±30分ぐらいに作業を抜けて仲間と食事に行く。この朝食であるが結構重い。最もポピュラーな料理はフル(下写真左)という空豆を大きな鍋で煮た料理で、それにパン/サラダがつく。時にはちょっと贅沢して河魚のフライ(下写真右)や、焼いたり揚げたりの肉料理を食べる。最後は紅茶を飲んで朝食を済ませる。夕食はかなり控えめ、また我々日本人が通常に取る時間帯の朝食(7-8時頃)はお茶/



ビスケット程度であるとのことである。

次に仕事であるが、今回の業務はタマネギ加工に関する業務であった。タマネギは近郊農家から購入する。カッサラでは「農家」と言うと一般的に農地の所有者を言う。実際に圃場で働いているのは小作労働者である。小作労働者への報酬は全て出来高制で、ここを耕したらいくら、籠1杯の収穫でいくらと言う具合で、日給/月給という日本の発想はなく、完全な実利主義であった。私の作業は、農家からタマネギを購入して、現地NGOの乾燥タマネギ生産を支援することであった。日本から導入した乾燥機の前で、NGO所属のスーダン人技術者と毎日タマネギの皮むき、スライス、乾燥、梱包などを一緒に行った。

カッサラでの生活/仕事を通して、やはり本国のスーダン人もこれまで本国以外で知り合ったスーダン人と同じであった。スーダン人は私にとって波長が合うのである。親切が押し売りではないのである。おそらくこの感覚は私以外の日本人も感じるであろう。スーダンの町には至る所に素焼きの給水壺(写真、ジールと言うらしい)が設置されている。非常に暑いスーダンでは飲料水がどこでもほしい。この誰でもが勝手に飲める水を提供するものがジールと呼ばれる素焼きの壺である。聞くとこれは住民が自発的に設置したものである。なんと気の利いた心遣いであろう。家畜の給水所もある。



スーダンは依然としてアメリカからの制裁対象国となっており、その影響も歴然とある。この影響か、日本からはお金の出し入れも直接できず、何かとビジネス交流の足かせはあるだろう。スーダンの主たる産業である農業を中心に、もっと日本との交流が盛んになることを望む。おそらくアフリカで最も日本人の気質になじむ、信用の出来る国民はスーダン人である。



首都を走る三輪タクシー



カッサラの作業仲間

(2016年5月 財津)